習作・ゼロの使い魔×架空戦記

相沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

習作・ゼロの使い魔×架空戦記

【Ｎコード】

Ｎ５０３９Ｚ

【作者名】

相沢

【あらすじ】

１９４５年２月下旬。日本海軍のとある護送船団がハルケギニアに転移する――――故郷が無くなってしまった艦隊将兵４２００名余りの運命や如何に。

序章（前書き）

不定期更新＆初心者文章ですので、それでもよろしい温かい心をお持ちの方はどうぞ。

文章力向上のため、アドバイス等ありましたら是非感想にお書き下されば幸いです。

序章

――時は１９４５年、昭和２０年２月の下旬。場所は朝鮮半島北部にある湾港都市『羅津（ラジン）』より、１０浬（約１８．５ｋｍ）程南下した朝鮮半島沿岸、日本海上。

この海域に今、日本海軍の艦艇１１隻が艦隊を組み、白波を蹴立てて日本本土への航行の途上にあった。目的地は山口県徳山に存在する、『海軍徳山燃料廠』。

艦隊は中心に空母を置き、その周りを巡洋艦、水雷艇、海防艦が取り囲む対空・対潜用の輪形陣を取っており、艦隊速度１５ノット（約２８ｋｍ）を保ちながら静々と南下を続けている。

これだけを見れば数ヶ月前に行われたマリアナ沖、レイテ沖海戦で完全に失われてしまった連合艦隊機動部隊の見事な復活にも見える。

しかしそれは空母の後ろに、３隻の輸送艦が続いていなければの話であるが。

艦隊輪形陣のほぼ中央に位置する空母――雲龍型航空母艦２番艦『天城』に後続して進むのは、１隻の特務運送艦と２隻の大型給油（タンカー）艦だ。これら３隻には羅津港から積み込んだ燃料・弾薬・食糧・その他軍需物資が文字通り満載されており、この３隻が艦隊の最重要護衛目標であり、更には艦隊が編成される事となった“作戦”の要

でもあった。

……その作戦自体は何の事は無い、ただの朝鮮半島及び満州に備蓄されていた石油を含む物資の輸送作戦である。しかしこの当時の日本は既に、戦争序盤に獲得した南方資源地帯と本土との輸送路が米軍により封鎖されつつあり、輸送船やタンカーを無事に本土と南方を往復させる事は非常に困難となっていた。ここに至り海軍は、1月下旬に発令された本土決戦『決号作戦』の準備として出来る限りの資源を本土へと運び込もうと考え、今作戦の発動に到ったのである。

艦隊は戦前は民間船として使用されていた運送艦と水雷艇、海防艦各2隻を除き、全て昭和19年以降に就役した新型艦で占められている。特に巡洋艦以上の大型艦艇は燃料不足で録(ろく)に動けず、羅津での補給の意味も含めて護衛艦隊に編入されていた。空母『天城』に至っては、飛ばす飛行機も無い事からその広大な格納庫を改造され、12000トンという大型貨物船並の物資搭載量を持たされた特務運送艦として編入されてしまっている。

更に護衛として派遣された4隻の艦艇も、駆逐艦より小型の水雷艇と海防艦であり、これがこの部隊を艦隊では無く“護送船団”である事を如実に示していた。

何はともあれ、羅津港に於いてなけなしの燃料補給を受け大量の物資を積み込んだ艦隊は、久しぶりに腹を一杯に満たして航海を続けていた。南方輸送路が遮断されたとはいえ、日本海は依然として日本の勢力圏内にあり、敵潜水艦や航空機が存在する情報も無い。行きも敵影すら見なかった。このまま順調に航海が進めば全艦無事

に徳山へと辿り着けると、艦隊将兵の誰もがそう思っていた。しかし――――。

――――――――――――

「……霧が深くなって来ましたな」

羅津港を出て約３時間。港から５０浬（約９３ｋｍ）程南の海上にて、旗艦を務める重巡洋艦『伊吹』の艦長である森下信夫大佐が呟いた。

「うーむ……この時期、この海域では海霧は起こらん筈なんだがなぁ」

それに応えるは、艦長の後ろに立つ男性。のんびりとしながらも５０代半ばという年齢を感じさせ無い、威風堂々した風格をその身から漂わせる彼の名は、木村昌福（きむらまさとみ）という。

この艦隊を預かる司令官である彼は、自分のトレードマークであるどでかいカイゼル髭を弄りながら窓の外を睨んだ。

この１時間、急に艦隊を包み始めた海霧はいよいよ濃くなり、既に『伊吹』の前を走る軽巡洋艦『酒匂（さかわ）』の姿は霧中標的（濃霧時に艦尾から落とされロープで曳かれる船型の浮き）でしか確認する事

は出来ない。

「まるでキスカだなぁ……各艦、連絡を密に取り艦隊速度を維持。見張り員も増員し、監視を怠らないように」

「はっ」

木村は以前自らが指揮した事のある撤退作戦が行われた島の名を口にしながら、艦長に指示を出す。『伊吹』には比較的優秀な電探（レーダー）が搭載されているが、それに頼り過ぎてはいけない事を彼は熟知していた。

指示を受けた航海長が自ら双眼鏡を握りしめて艦橋から出ていくのを見届け、木村は再び窓の外に視線を移した。

「不思議な事もあるもんだなぁ……」

誰にも聞こえない程の声量で、ぽつりと呟く。

そもそもこれ程までになる濃霧は今いる海域の更に東北方、北海道よりも上の海域で6～8月の夏に発生する。そして今は2月。地域的にも時期的にも、ここまで視界が真っ白になる海霧は通常考えられない。正に異常気象と言うべき濃い霧であった。

一方で、増員されて艦橋脇や艦橋上に配置された見張り員達も、双眼鏡越しに目を皿の様にして各員が僚艦がいる方角を監視していた。

指令を受けてから5分。深みを増す海霧は止まる事を知らず、そ

のたった5分間で今まで見えていた筈の『酒匂』の霧中標的が影すらも見えなくなる。

だが、問題は自然に……しかし瞬間的にそれどころでは無い段階へと進んでいた。

「な……これは一体どういう事だ」

黒い士官服を着込み、自ら艦橋上に立って双眼鏡を覗いていた航海長が、双眼鏡を下ろしながら言った。その声色は、明らかな焦りを孕んだ声だった。

声を上げてから、周りを見渡す。すぐそばで共に監視している筈の部下達が、見えない。今数瞬前まで聞こえていた部下達の声すら、聞こえない。視界は自分が今立っている床が見えない程真っ白だ。

「ホワイトアウト……？　いや、違う」

航海長は霧や雪が深い時に起こりうる現象の名を口ずさみ、即座に否定した。敵性語だったがそんな事はこの際どうでもいい。こんな真っ白で何も見えない、まして音も聞こえない現象なんて有り得ない。この世界に有り得る筈が無い。

航海長は頭の中で呪文の様に有り得ないと連呼しながらも、咄嗟に自分のすぐ右脇にある伝声管へと手を伸ばす。僅かに残っていた理性で、彼はこの理解不能な出来事を司令へ伝えようとしたのだ。

しかし、彼のその手は伝声管を掴めなかった。……否、掴む事無く摺り抜けた。

「え……？」

思わず情けない声を出してしまう航海長。そして、彼は自分の身に起こった出来事を理解する事無く、直後に突然頭部を襲った衝撃により意識を失ったのだった。

――時は１９４５年、昭和２０年２月２０日。場所は朝鮮半島沿岸、日本海上。

この日、大日本帝国海軍物資輸送船団……通称『極部隊』は、この世界から忽然とその姿を消した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5039z/

習作・ゼロの使い魔×架空戦記

2011年12月17日00時46分発行